

# 老舍『趙子曰』試論（前）

渡 辺 武 秀

## 序

茅盾は『趙子曰』に対する出版当時の印象を次のように述べている。（注1）

『趙子曰』は私に深い印象を与えた。その当時、文壇にちょうど暴風雨のような新運動が巻き起こっていたし、その当時、熱烈な闘争生活の中から体験してきた作家達の筆による人物と『趙子曰』とは少なからざる距離があった。言わば、その当時私自身もちょうど小市民知識分子に材を取り創作を始めていた、だが、『趙子曰』の作者が生活に対して取る観察の角度に対して、私自身の考えも尽く同じにすることは出来ない。しかし、いずれにしろ、『趙子曰』は私に深い印象を与えた。老舍先生の喜び笑い怒り罵る筆墨の背後に、私は彼の生活に対する態度の厳格さ、彼の正義感と暖かい心、祖国に対する誠実な愛と熱望を感じた。

老舍は1924年夏、ロンドン大学東方学院の中国語教師として英国に渡る。以後、その地で、『老張の哲学』（1926）をものにし文壇に登場した。そして更に『趙子曰』（1927）『二馬』（1929）を続けて『小説月報』誌上に発表し（注2）、文壇での地位を不動のものにした。茅盾が前述のような印象をもった『趙子曰』は老舍の第二作目ということになる。

この『趙子曰』という作品は、当時、多くの読者を持っていたし（注3）、又発表順の上からも老舍の作品において極めて重要な位置を占める。にもかかわらず、最近の評価は決して良くない。次の文章は1984年の文学史の一節である。（注4）

ある時には、欺き圧迫する者の悪行と、被害者の不幸の中から笑いの材料を捜し出し、前者に対する憤慨と、後者に対する同情を笑い声によって薄めてしまい、果ては消し去ってしまう。諷刺は力をなくし、ユーモアは狡猾に近く、作品の思想意義に影響を与え、芸術表現において、ある時には、不確かさやくどさに流れるのを免れない。これらの弱点は材料を大学生の生活に取る『趙子曰』に顕著に現れている。

周知のように、老舍の作品はしばしば「ユーモア作品」と呼ばれることがあるが、文学史は「ユーモア」を否定的に見、かつその「ユーモア」の欠点を最も多くもつものが『趙子曰』だとする。

文学史の評価は、裏を返せば、老舍の作品の中での「ユーモア作品」の代表が『趙子曰』であると述べている、と取ることも出来る。では、ここで言及されている「ユーモア」とは一体どういうものか。もちろん文学史の中にこの回答を見いだすことは出来ないし、従来のどの老舍研究家も具体的な回答を与えているようには思えない。確かに、これに回答を与えることは簡単でない。だが、筆者には、「ユーモア」という言葉で表されている部分にこそ、老舍文学の本質に抵触するものがあるように思える。そこで、筆者は、何が老舍の「ユーモア」かには答えられなくとも、作品を徹底的に分析

し、作品全体のストーリーの展開の、どの部分にユーモラスな表現があり、それがストーリーの展開でどのような効果を上げているかを考えることによって、「ユーモア」という言葉で象徴的に表現される老舎文学の特徴には触れられるのではないかと考えた。

この考えで行ったのが「老舎『老張的哲学』私論」の「幽默（ユーモア）」（注5）の項である。そこでいささか老舎文学の本質のようなものを述べる事が出来たように思う。そこで、今回更に、この小論で、最も「ユーモア」的と考えられる『趙子曰』を取り上げ、老舎がこの作品で行った試み、「ユーモア」という言葉で称される老舎文学の本質を考えてみたい。

この考察によって、冒頭に挙げた、矛盾が「深い印象を与えられた」理由の解明や、作品の「ユーモア」を意味のないものとする評価にいささか反論を加える事が出来るのではないかと。さらに、この考察を通じて、老舎文学の出発になったものが、わずかなりとも明らかにできれば幸いである。

## あ ら す じ

物語りは天台館の第3号室から始まる。その住人は趙子曰。作品の主人公である。「趙」は『百家姓』の一番目、「子曰」は『論語』の冒頭の二字に由来する。彼は天台館にいては学生界のリーダーだと自認している。

数人の友人たちが彼の部屋に集まり盛んに議論している。内容は学校が実施する試験に反対し、校長を吊し上げようとするものだ。結局、討論は「やっつけろ！」に行き着いた。

この討論に参加しなかった住人がいる。李景純である。彼は運動に反対であり、討論がいずれにしろ「やっつけろ！」に行き着くことを見越していた。この李景純は趙子曰に運動に加わらず、家に帰って農業の研究、実験をしろ、と忠告する。

だが、李景純の忠告も水の泡となる。欧陽天風と武端に料理屋へ強引に誘われ、酒や料理を目の前にすると、忠告もたちまち消え失せる。しかも、情報通の武端は趙子曰に耳打ちする、「王女士与李景純は恋仲だ」と。王女士に思いを寄せる趙子曰には、この言葉は効果的だった。

趙をリーダーとする学生達は学校を襲う。この事件で趙は負傷し、病院に入院する。入院時に、欧陽は事件に参加していなかったこと、又、自分は事件の責任を取らされて退学処分になったことが趙に伝えられる。

やがて怪我も癒え、趙は退院し、天台館に帰って来る。趙は疑うことを知らない。欧陽に出会うとすぐ熱い握手を交わす。そして欧陽、武に誘われると、さっそく料理屋に直行する。

料理屋で欧陽から意外な提案が出される。校長の排斥により張教授が学生の支持を受け、台頭している。この張教授を打倒するため、今度は校長を担ぎ出そうというのだ。なかなか承知しない趙に、欧陽は切り札を出す。張教授は教え子の王女士に手を出している、つまり校長の復職運動は、張教授の打倒であり、王女士を守ることでもあると。

## 二

ある日、趙の友人、莫大年は意外な秘密を知ることになる。闇の中で欧陽と王女士が会っていた。聞こえる口論調の会話は断片的だが、二人の仲が決して普通でないと感じ取れた。莫はさっそく趙に

忠告する。欧陽は信用出来ない人物だから付き合うべきではないと。

突然、趙は誰にも告げず、一人汽車に乗り天津に行ってしまう。

天津には、かつての天台館での仲間の周少廉がいた。彼は天津の神易大学に在籍しており、彼の世話で、有力者の息子の家庭教師として働く。天津での生活は順調に行くかに見えた。だが、ある女性と知り合ったばかりに、わずか三ヶ月ほどで終止符を打たざるをえなくなる。彼女の夫は兵隊くずれで、その男といざこざが起こるのを恐れたのだ。

趙は北京に帰って来た。彼を待っていたのは、天台館の仲間割れであった。その原因は趙だった。欧陽は李が趙に忠告したので趙が姿を消したと考え、李を罵倒したのだ。李は天台館を出、李を支持する莫も天台館を去った。趙はこの仲間割れに直面しても無力だった。趙は李に付くか、欧陽かの選択を迫られ、結局、欧陽を切り捨てられなかった。

### 三

欧陽は女権発表会に関わっていた。欧陽は趙を会の成立大会に引き出そうとする。「王女士も来る。」この一言で決まった。大会の会場で欧陽は趙に張教授を演台から引きずり降ろせと指示する。張教授は引きずり降ろした。だが、王女士はとうとう来なかった。趙は「欧陽がペテンにかけた」と憤慨する。その時、武は囁く「李景純が来ていただろう、だったら王女士は来れないさ」と。

趙はおひとよし。今度は、女権発表会の資金集めのため、おだてられ芝居をやることになる。努力奮闘の結果、芝居は成功した。だが彼の努力は報われなかった。欧陽は芝居で集めた金を着服し、尚且つ、その罪を趙と武になすり付けたのだ。にも拘らず、趙と武は欧陽の弁舌にすっかり丸め込まれてしまう。

やがて武も欧陽の正体を知り、天台館から去って行く。その際、武は趙に欧陽から離れるよう忠告するが、趙はまだ欧陽を信じようとする。

趙と欧陽との決別は、王女士の手紙によってである。欧陽は「王女士に会わせてやる」と料理屋に誘う。だが、王女士は幾ら待っても現れない。そこに一通の手紙がもたらされる。王女士からだった。手紙には「欧陽の言いなりになり、自分を脅迫する権利はない」とあった。この手紙で趙はやっと悟る。

### 四

趙と李は友情を取り戻す。

ある日、李は趙の所に問題解決の依頼をしに来た。今、武の建議で役所が中心になり天壇を分解し、それを外国に売ろうという計画が進行中である。その計画を阻止してくれというのだ。

さっそく趙は実行する。武を天台館に連れ込み、説得し、納得させる。その時、莫から趙に電話がかかって来る。李が官憲に捕らえられ、刑務所に繋がれたというのだ。

驚いた趙と莫は連れだって、急いで刑務所に面会に行く。李は事件の真相を次のように語る。

「自分は軍閥の一人、賀占元を暗殺しようとしたが失敗して捕らえられた。賀占元は北京に配属されて以後、大通りで重い罪を犯したわけでもない数人の囚人を銃殺し、更に、有名な人物を一、二人殺すことで凡ての民衆運動を弾圧しようとしていた。その賀占元の息子、賀金山と欧陽は知人で、欧陽は張教授の殺害を、賀金山を通じて賀占元に働き掛けていた。勿論、賀占元暗殺計画は単に張教授を救うためのみならず、救国の為でもあった」と。

趙たちは李を救うべく運動を始めるが、奔走も空しく、李は銃殺される。

李の部屋に残された王女士からの手紙で予想もつかなかった人間関係が明らかになる。かつて欧陽と王女士は駆け落ちまでした恋仲であった。だが欧陽は容貌の美しさとは裏腹に、ひどく残忍な男で、王女士に身を売らせて金を稼がせることも平気でする人物であった。金に困った欧陽たちは、欧陽の親戚に当たる張教授に頼った。張教授の援助の下でも欧陽の素行は改まらず、かえって、王女士をかわいがる張教授を怨み、果てはひどい仕打ちをする。そこで欧陽から逃れるため、張教授と共に日本に行き結婚する、云々と書かれてあった。結局、李は王女士と恋仲などではなく、相談相手に過ぎなかったのである。

趙は莫や武に李の遺体の処理、李の母親の世話を託し、何かの決心を胸に秘めて彼らと別れて行く。

## 第1節 登場人物の配置

作品では、まず、後まで問題にされる欧陽と趙子曰との関係、李景純と趙子曰との関係が冒頭の部分で明らかにされている。

欧陽と趙子曰との関係を、作者は次のように述べる。

彼（欧陽）の容貌、服装は趙子曰に比べると、その美しさたるや十倍にとどまらない。だが彼ら二人は形と影のようにいつも離れない親友だ。……（略）……麻雀の席で、彼らの関係はますます密接になる。趙子曰がもし麻雀に負けて金を欧陽天風に取られたら、彼は麻雀をするのが最も高尚な遊びであると思う以外に、彼は無形の一種の慈善事業をしたかのように感じるのである。

（第二・2）

一方、李景純と趙子曰との仲は、次のように述べられている。

趙子曰は李景純に対して、どうしてかわからないが、いつもいささか恐れる様子がある。さらに不思議なのは、李景純に会わないと勉強のことを思い出さないのに、李景純にちょっと会っただけでたちどころに書物をこっそり引き出す。

（第三・2）

この引用から、既に、遊び↔学問、弛緩↔緊張、軟↔硬といった欧陽と李景純に対する、作者の描き分けが読み取れる。更に、この李景純が趙子曰に忠告する形で、欧陽と対照的な立場にいることを暗示する発言をする。

もちろん君自身もその咎を逃れることはできない。でも外からの誘惑、その力だって小さくはない。友だち付き合いで言えば、君にいったい何人の真の友達がいる？君の、あの唯一の親友にしても、おおよそ彼が誰だかわかるだろうが、彼は君の友だちかい、それとも敵かい？（第三・2）

この引用文のあと、李景純の言葉を受けて趙子曰は「欧……」と言いかけるが、李景純はその言葉をさへぎる。李景純が欧陽のことを「彼」として実名を言わないのは、欧陽が「李瘦猴（李のやせ



猿）」（第三・３）と名指して敵意をむき出すことと対照的であり、二人の性格の違いを窺わせる。

そして更に、李景純は趙子曰に対して三つの提言をする。第一は、一つの学問分野を選んで四五年死に物狂いで勉強する。第二は趙子曰の故郷には家の土地があるのだから、農学の書籍と新式の農機具を買い、家に帰り一方では勉強し一方では実験する。第三は、ちゃんとした学問がないと危険ではあるが、良い経験であれ悪い経験であれ、経験は大事だから経験を積み為にも社会でやる仕事を探す。

（第三・２）李景純は、欧陽とは拘わらず、三つのうちどれかを選択し、実行するように勧める。

このことから既に解るように、まず最初に、暗示的ではあるが、李景純を「是」とし、欧陽を「非」とする構図を作り上げていると考えられる。（注６）

そして、二人の間に、他の登場人物を作品で果たす役割に応じて配している。比喻的に言えば、一方の極に李景純という人物が配され、それと対照的な極に欧陽天風という人物が配されており、その極の間に電子のごとき状態で、趙子曰を初めとする登場人物がいる、と考えることができる。作品での、李景純と欧陽との登場回数は決して多くない。だが、最初に示された李景純の「是」と、欧陽の「非」は、作品全体を通じて、登場人物たちの言動、行動を規定していくことになる。

例えば、李景純や欧陽の二つの極の間に在って、この作品で重要な脇役である武端と莫大年も役割に応じて、巧妙に対照的に描き分けられている。比較的早い時期に欧陽の「非」を見抜き、彼と決別する莫大年と、人の「秘密」を探ることに自信をもち、「秘密」の持つ魅力から、「秘密」を流す欧陽と行動を共にする武端とは、はっきりタイプが違う。

このようにして『趙子曰』の舞台は作り上げられている。李景純の方に趙子曰がつけば、読者は安心し、欧陽天風の方につけば読者は失望落胆するという、あくまで暗示的ではあるが、言わば勧善懲悪小説にしばしば見られるハッピーエンドの構造が準備されるのである。

したがってこの作品は、趙子曰という人物がいつ、どのようにして欧陽と決別し、李景純の方へ行くかというのが作品の眼目であり、この転機に拘わってくるのが王女士である。

作品の構造は、意外に容易に見いだせる。だが、ストーリーの展開は決して単純ではなく、屈折に富む。ここに関わるのが「ユーモア」ではないか。

「是」だから「是」に従い、「非」だから「非」から離れ、「非」を打倒すべきである。これは正しい論である。しかし、人間はこう簡単に割り切れるような精神構造はしていないのではないか。「非」にも不思議な魅力があり、つい「非」に従うことも有り得る。また、頭では正しい論とわかっていても、相手の言い方、或は言い出すタイミング、その場の雰囲気により、この論を受け入れない状況も起こり得る。確かにこの態度は正しくない。しかしながら、このような状況がないとは必ずしも言い切れない。これも人間の複雑な一面である。このような人間の微妙かつ複雑なところを醸し出すのが「ユーモア」と言われるものであるように思える。

次に節を改めて、欧陽と李景純との二つの極の間で、趙子曰が王女士をめぐるどのような行動を取っているのか、ストーリーの展開を追いながら、検討して行く。

（続）

【注】

- 【1】 「光輝工作二十年的老舍先生」（『老舍研究資料』）原載1944年4月17日重慶『新華日報』  
「新華副刊」
- 【2】 『趙子曰』は『小説月報』18巻3号（1927年3月）～18巻11号（同年11月）まで連載された。  
ちなみに、『二馬』は、同雑誌20巻5号（1929年5月）～20巻12号（同年12月）まで掲載されている。
- 【3】 1949年までの『趙子曰』の単行本としての出版状況は、確認されているもので以下のとおりである。

＜商務印書館＞

1928年4月初版，11月再版，1929年3月3版，1932年上海事変で商務印書館が大火に遭った後，  
1933年2月1版，1935年5月2版，1943年再版，1947年2月4版，

＜上海・晨光＞

1948年1月初版，11月再版，1949年4月3版，  
（『老舍研究資料編目』北京市図書館学会・1983年）

このことから、『趙子曰』がどれほど読まれていたかが推測出来るのではないか。

また、『趙子曰』が掲載される2ヶ月前の『小説月報』18巻1号（1927年1月）で、「最後一頁」に、編者は『趙子曰』に関して次のように書いている。

『趙子曰』の作者は、『老張的哲学』を書いた老舍君である。こんどの『趙子曰』は『老張的哲学』に較べると更に進歩している。書いているのは、教員閑民ではなく、学生達であり、普段に出会い、いつも付き合っている者たちである。老舍君は軽妙な筆で、北京のアパート生活を描き、真に迫るものがある。『趙子曰』の数人の個性は、我々読者の面前に浮かぶ。後半部はむしろ厳粛な叙述に入って行き、前半部のユーモアはもうない。だが、同様に生き生きとしている。かつ、一人の偉大な犠牲者の故事で作品を結んでおり、これは我々を限りない感嘆へと導くものである。この作品は、始めは笑わせ、やがて感動させ、終わりに悲憤させる。

発表以前にこの作品を読んだであろう編者は、このように感動を述べている。このときの編者は、恐らく鄭振鐸であろうが、この感動からも、読者にどれほど受け入れられたかの一端を窺うことが出来るだろう。

- 【4】 『中国現代文学史簡編』唐弢主編・人民文学出版社
- 【5】 「老舍『老張的哲学』私論」『集刊東洋学』57号（1987・5）
- 【6】 この傾向は『老張的哲学』に既に見えるものである。（同上論文参照）この点については更に考察しなければならないが、筆者は現在、李景純と欧陽の極をまず決めるというのは、二点が決まれば一つの円が決まるという如く、一つの作品世界枠を作り上げる老舍の創作方法のように思われる。しかも、この円は更に大きな相似の円がいつも存在するかのような印象を持たせながら描き出されている。